

(承前)「チコちゃん」がまだサルだったころの話

あなたは「サタン教」と「神教」のどちらを選ぶつもりか？

Greatchain

2019/06/27

どうしても補足しなければなるまい。全米を席捲したベン・スタインの映画 Expelled: No Intelligence Allowed (追放されて：どんなインテリジェンスも許されない)の冒頭に、ベンが生徒になって、高校の生物のクラスに出席している場面が出てくる。教師が、生物進化はダーウィンで考えねばならない、と言うと、ベンが手をあげて「インテリジェント・デザインは駄目なのですか？」と聞く。すると教師は「そういうことを言う奴は外へ出ろ」と言って廊下へ放り出す。後からもう一人出されてくると、ベンは顔を合わせ、So awesome! (おおこわ!)と言う場面がある——。日本では、人々は主としてメディアを通じて、この生物の授業を受けている。怖くて手をあげる生徒はいないようだ。なぜだろうか？ ひとつにはおそらく、キリスト教の神の話など、どうでもいいと思っているのであろう。

しかし、ID 理論は間違いなく、キリスト教の神の話ではない。必死に反対する者たちは、そうでないにもかかわらず、そこが怪しからんのだと息巻いている。ID は、ごく普通の現在行われる科学の論法を用いて、論証を進めていく。すると、どうしても人間のような、考えて創る力を持ったもの＝「インテリジェンス」の存在を、想定せざるをえなくなる。それを「神」と言ってよいか、どうかさえわからない。ひょっとしたら「悪魔」かもしれない。それ以上は証明できない——そういうスタンスである。彼らはそこを特に厳密に論証しようとする。それは、反対者が、「ID は初めから神を想定する理論だ、聞く値打ちのない、ルール違反のエセ科学だ」と(ほとんどの場合、本も読まず話も聞かずに)宣伝するからである。(私はこのありさまを、長い時間をかけて雑誌連載、いわば実況中継した。) 彼らは、よほど真理が恐ろしい者たちに違いない。彼らはいわば、神の匂いがただけで、恐慌を起す者たちである。

これは、**神を指し示す** (point to) 理論であって、神を捕まえる理論ではない、と私はあるシンポジウムで言ったことがある。「指し示す」ことは「捕まえて見せる」ことではない。また、一枚の紙の上に、確実に証明できることを、隅の方からインクで塗りつぶしていくと、真ん中に、Godらしく読める空白が現れるようなものだ、という比喻を使ったこともある。

そのころはそうは聞かなかったが、今の科学者の話を聞くと、どこまでも唯物論的方法で、宇宙を構成する究極の「粒子」を追求していくと、ヒッグズ粒子とも呼ばれる「神の粒子」が想定されるようであり、これはどうやら「捕まえる」粒子のようである。これを CERN と呼ばれる研究所のスイスとフランスにまたがる巨大な加速衝突器で、実験（捕獲作戦？）をしているらしい。そしてこれは、いみじくも**サタン集団**の実験設備である。これは検索してみれば容易く確認できる。ゴットハルトと呼ばれる世界最長のトンネルの竣工式で、2016年、ロンドン・オリンピックの時のような、念の入った悪魔の儀式が行われた(Gotthard tunnel opening ceremony)。これだけでも研究に値するので、ごらんになるとよい。

もし私の観察が正しいのだとすると、前に言ったように、科学者の態度として「唯物論的中立」などというものはないことがわかる。科学者は、神を対象として、傲慢にも神を捕獲することにとりかかるか、それとも、ID 理論家や、日本人のように、「生かされている」という態度に立ち、謙虚に、自分を超えた宇宙大自然を研究するか、どちらかでなければならぬ。これは研究の基本的態度の問題だから、研究の成果には関係がないように見えるかもしれない。しかし、人が自然を理解しようとするとき、自然は、傲慢な者に対してより、謙虚な者に対して、より大きく自分を開いてくれるであろう。これは宇宙が一つの生命体であるという認識に立てば、当然のことである。ある学者のように、自然選択を「武器」だと言ったとたんに、それは科学でさえなくなる。

もう一つ最近、気づいたことは、マイケル・ビーヒーという ID 理論家が唱え、大きな貢献をした、「還元不能の複雑性」Irreducible Complexity という、生命体や機能する器官のあり方を言い表す基本原理の、より大きな意味である。ダーウィン進化論者は、生物は徐々に少しずつ変わっていくと言ひ、それが基本である。しかし生命体や生きた器官は、無限に分割などできず、決まったブロックによってしか生ずることができないということを、この原理は、いくつかの実例を使って原則化したものである。これは物理学の世界で「量子飛躍」といわれる現象に当たるだろう。エネルギーは、無限に分割はできず、決まったブロックでしか増減しないという原理に、それは内容でも重要性でも、匹敵するものである。それは完成した種と別の種の間、中間種・移行種などというものがないことを、化石の実証とは別の角度から、確認するものである。

私は、還元不能の複雑性が唱えられていたときの、反 ID 派のヒステリックな反対の理屈を「中継」していたが、滑稽で、楽しませていただいたことを覚えている。ビーヒーの、細菌の鞭毛の生成による例と、ごく簡単なネズミ捕りの比喩はよく知られている。これは、生物学的進化が、物理学的進化と、本質的に同じ「飛躍」によるという宇宙的仮説にも通じ、生物学上の卓見であるにもかかわらず、学界はこれを無視し続けている。人間という種の出現

によって、突然、この地上に抽象（言語）能力によって構築される、高いレベルの世界が生まれ、それは次の、より高い霊的な次元への「量子飛躍」を予想させるものである。（少なくともデイヴィド・ウィルコックによれば、そう言える。）唯物論者は、体の形の変化がすべてであるかのように考え、教え、それによってこの世界全体の覚醒の足を引っ張っている。